# 専念寺通信

専念寺通信

二月号（ＮＯ．１０２）
http://sennenji.s296.xrea.com/

お正月が終わり、もう如月です。春はすぐそこまで来ているとは言え、まだまだ寒い日が続いています。みなさまおかわりなくお過ごしですか。

☆　**節分**

２月３日は節分です。節分は本来、よっつの季節の始まりの日を意味しました。立春、立夏、立秋、立冬の前の日のことを、せつぶん、または、せちぶんと呼んでいました。「季節を分けること」を意味する言葉です。江戸時代以降は、毎年、立春の前日をさして呼ぶようになりました。節分といえば、豆まき。みなさんのご家庭でも、お父さんが鬼になったり、幼稚園の頃は先生が鬼になったりして、鬼をめがけて豆を撒いた経験がおありではないでしょうか。誰かが鬼にならなくとも、見えない鬼にむかって「鬼は外、福は内！」と声を出して撒きます。豆を撒くことには、邪気を払い、一年の無病息災を祈願する意味があるとされています。節分当日、テレビのニュースなどでお相撲さんや芸能人が神社仏閣で豆を撒いている様子が映されたりします。また、「年の数だけ豆を食べると縁起がよい。」と言われていますが、固い豆です、あんまりたくさんの数を無理して一度に食べるのも考えものかもしれません。

☆　**社会が発展すると・・・。**

『専念寺通信』１月号で触れましたが、１００年に一度の規模といわれる世界の経済危機はまだおさまる様子がみえません。１月号を書いていた時点では、２００９年春までに「３万人」が職を失うと思われていましたが、その数は報道のたびに訂正され、５万になり８万になり、１月３０日の朝日新聞によればこの春までに１２万４８００人が職を失うとのことです。いわゆる景気の悪化が現われ始めたのは去年の秋です。けれど、そのずっと前からどこかで何かしらの流れが間違った方向へむかっていたと思われます。それが何なのかは、政治や経済の専門家ではない私共にはこれと断言はできませんが、ひとつだけはっきりしていることがあります。それは、社会が発展すると、最終的に人は幸せになるはずだ、という素朴な疑問に対する答えが「否」かもしれないということです。私たちの国は「先進国」と呼ばれています。「後進国」という言葉は差別的だから「発展途上国」と呼ぶべきだとの案が「先進国」で出され、この呼び方が定着しています。「おくれているのではない。発展の途中なのだ。」という意味です。この呼び変え自体に「国家は発展すべきであり、発展はよいことだ。」という主旨が感じられます。私たちはいろいろな面での発展をめざしました。少なくともこの６３年間は戦争をせず、核兵器を持たず、ひろい意味での経済の発展を、文化や教育の発展を、医療や福祉の発展をめざして来ました。けれど現在、医療の現場では最先端の研究がすすむ一方、ごく普通の医師や看護師が足りません。地方都市では病院そのものが不足しています。小児科・産婦人科医の不足は特に深刻で、子を産み育てる環境は良くなっていません。緑や公園が少なくなり、発展とともに悪くなったとも言えます。高齢者や障害を持った人たちに対しては、国の保護がどんどん減らされています。教育の現場も、不登校の子供たちが増え、ノイローゼになる教師が増え、幸福な状況とは言えません。私たちの国はどの部分がどのように「発展」したのでしょうか。切り捨てられた部分はどこなのでしょうか。働いてお金を稼いで使って、お金を稼いで使って、の繰り返しだけを「国家の発展」と呼ぶのではないはずです。どこを変えてゆけばこの流れを繰り返さずにすむのでしょうか。とても難しい問題に私たちは直面しています。まず、何に直面しているのかを皆で考えるだけでも最初の一歩になるのではないでしょうか。この厳しい時代に、ささやかな私共の寺ができることをたゆまず行なってゆきたいと思っております。

平成２１年２月１日　大黒